

や、学際的な取組みが必要となるものが次々と見出され、国際協力・交流の必要性がますます増大している。この状況下で、本学の特徴を生かすには、自ら積極的に課題を見出し、諸外国の大学・研究機関等にこれらのテーマを絶えず提案し、国際的なプロジェクトを実行するほか、地域社会と連携を図るなどの独自の取組みが必要である」としたうえで、

- ① 国際的共同研究の推進
- ② 国際シンポジウムの開催
- ③ 地域社会との連携の必要性

また、今後、学術交流を進めていくうえでは、学術交流に関わる内外の情報を収集整理し、その成果を学内外に向けて提供していくことが必要となってくるため、協定を結んでいる大学間・学部間の交流の概要や成果などを「広大フォーラム」で公表したり、学術に関する国際交流や国際協力を円滑に進めていくために、関連する情報を収集整理し、データ化し、必要なときに必要な情報が得やすいシステム作りが必要となってくるし、将来的には、これらの業務を日常的に処理する「学術交流情報センター(仮称)」の構想について検討することが必要であると提案している。

**四 国際社会、特に開発途上国に対する、学術を通じての国際協力の積極的な推進**

「日本の大学が海外の進んだ学術研究成果を積極的に取り入れて発展してきたように、開発途上国の高等教育機関等もさまざまな協力や援助を期待して発展に努力している」とし、「これまでに本学は、国際的な機関 例えばWHO(世界保健機構)が行う調査・医療活動、ユネスコが行う教育開発事業、JICAを通じて行われる開発途上国の開発援助などを積極的に支援し、協力してきている」ことから、「今後この

姿勢を堅持し、国際社会、特にアジア太平洋地域の開発途上国の高等教育機関の充実、人づくり・国づくりに相応の役割を担い、国際社会に貢献して行くことが大切である。特に、新設の国際協力研究科は、この趣旨が具体的に生かされた大学院であり、今後一層の整備充実が望まれる」と提言している。

- ① 国際機関を通じての協力
- ② JICAを通じて行われる開発援助への協力
- ③ 国際的な学術団体等への参画

**三 学術国際交流・協力に必要な経費の確保**

このような学術国際交流・協力の実をあげるためには、当然、必要な資金の裏付けがなければならぬ。では、そのための方策としてどのようなものが考えられるか。

まず、文部省事業、日本学術振興会事業などの公的助成制度の積極的な活用である。次に、奨学寄附金などの民間資金の活用を図ったり、財団法人などの公的な法人による学術研究の助成金の申請など、積極的に外部資金の受け入れに努力する。

最後に、「国際交流基金」の創設が提案されている。例えば来年度に予定されている「統合移転記念事業」や「広島大学創立五十周年」を機に、「大学構成員はもとより、同窓会等の大学関係者、地域社会から理解が得られるような方法」で、「学術国際交流目的の寄付金を募り、基金として活用することを考える必要」がある。

このように、本学独自の資金を得ること、同専門委員会が提案している事項が確実に進展していくと思われる。

**北スマトラ大学より Award in Education and Science Promotion を受賞**

歯学部歯科補綴学第二講座 ◆ 浜田 泰 三

**北スマトラ大学歯学部との 交流と特別講演の依頼**

北スマトラ大学は、一九八二年に本学との大学間協定を締結した大学である。私は、国際交流の自己点検・評価についてもまとめるよう昨夏依頼を受け、この大学についても調べた。協定締結の頃は留学生もおり、交流実績が認められるが、その後は人の交流もなく、この数年間は、本学国際交流課の記録では、交流実績は皆無であった。



一九九四年十二月に、エブランガ大学院での博士最終試験にでかける時に、ちょうど北スマトラ大学歯学部創立記念学術大会特別講演の依頼があった。インドネシアを東の端から西の端まで移動するのは大変だし、それ以上は、交流協定が形骸化していることへのうしろめたさがあったので、依頼に応じることとなった。

**受賞理由一十四年以上にわたるたゆまない教育と学術振興の支援に対して**

英国へ出かけるときは異なった緊張感を強いられる国とはいえず、なぜ訪問するのかと自問すれば、それは、「広島で過ごした人々の支援」の一事に尽きる気がする。あと一押しで、彼らも母校でその留学実績を確立できるところにいる。「ここで止めたなら何も無くなる」こんなことを実感しているからである。

今回の金メダル受賞は、十四年以上(私が教授になつて以来)にわたるたゆまない教育と学術振興の支援に対して学長より感謝の意を表す、とあるが、さらなる期待ともされる。研究と同じで途中で投げたし、まれば無に等しいわけで、引き続き交流が必要であろう。私にとっても、歯学部にとっても、英国などとの交流はもとより、インドネシアなどとの交流も、ともにバランスを保って継続していくことが求められているのである。(はまだ、たいそう)